一般の部　課題　「ごん狐」　新美南吉

ナレ①　：兵十（ひょうじゅう）が、赤い井戸のところで、麦をといでいました。

兵十は今まで、おっ母と二人きりで、貧しいくらしをしていたもので、おっ母が死んでしまっては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

こちらの物置の後から見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

鰯屋　：「いわしのやすうりだアい。いきのいいいわしだアい」

ナレ①　：ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていきました。

と、弥助のおかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。

いわし売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいりました。

ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。

そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向ってかけもどりました。

途中の坂の上でふりかえって見ますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

ナレ②：つぎの日には、ごんは山で栗をどっさりひろって、それをかかえて、兵十の家へいきました。

裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午飯（ひるめし）をたべかけて、茶椀をもったまま、ぼんやりと考えこんでいました。

へんなことには兵十の頬ぺたに、かすり傷がついています。

どうしたんだろうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

加助：「一たいだれが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。

おかげでおれは、盗人（ぬすびと）と思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」

ナレ②：と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。

かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこうおもいながら、そっと物置の方へまわってその入口に、栗をおいてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって来てやりました。

そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもっていきました。

渡部：月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。

中山さまのお城の下を通ってすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。

話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片がわにかくれて、じっとしていました。話声はだんだん近くなりました。

ナレ③：それは、兵十と加助（かすけ）というお百姓でした。

兵十：「そうそう、なあ加助」

ナレ③：と、兵十がいいました。

加助：「ああん？」

兵十：「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」

加助：「何が？」

兵十：「おっ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだよ」

加助：「ふうん、だれが？」

兵十：「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」

ナレ③：ごんは、ふたりのあとをつけていきました。

加助：「ほんとかい？」

兵十：「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ」

加助：「へえ、へんなこともあるもんだなア」

ナレ③：それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひょいと、後（うしろ）を見ました。

ごんはびくっとして、小さくなってたちどまりました。

加助は、ごんには気がつかないで、そのままさっさとあるきました。

吉兵衛（きちべえ）というお百姓の家まで来ると、二人はそこへはいっていきました。

ポンポンポンポンと木魚（もくぎょ）の音がしています。窓の障子にあかりがさしていて、大きな坊主頭がうつって動いていました。

ごんは、「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。

しばらくすると、また三人ほど、人がつれだって吉兵衛の家へはいっていきました。

お経を読む声がきこえて来ました。

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。

兵十と加助は、また一しょにかえっていきます。

ごんは、二人の話をきこうと思って、ついていきました。

兵十の影法師をふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

加助：「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

兵十：「えっ？」

ナレ③：と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

加助：「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしゃって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

兵十：「そうかなあ」

加助：「そうだとも。だから、まいにち神さまにお礼を言うがいいよ」

兵十：「うん」

渡部：ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。

おれが、栗や松たけを持っていってやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじゃア、おれは、引き合わないなあ。

ナレ④：そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。

兵十は物置で縄をなっていました。

それでごんは家の裏口から、こっそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。

と狐が家の中へはいったではありませんか。

こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

兵十：「ようし。」

渡部：兵十は立ちあがって、納屋にかけてある火縄銃をとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。

ごんは、ばたりとたおれました。

兵十はかけよって来ました。

家の中を見ると、土間に栗（くり）が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。

兵十　：「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは」

渡部　：ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。

青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。

配役

ナレーション①　・・・E

ナレーション②　・・・F

ナレーション③　・・・G

兵十　・・・H

加助・ナレーション④　・・・I

配役は選考の結果お知らせします。

ナレーション・鰯屋　・・・渡部陽一